

緒 言

土屋 弘行

金沢大学大学院医薬保健学総合研究科・医薬保健学域医学類機能再建学(整形外科科学)

骨軟部腫瘍を専門としない多くの整形外科医にとって、骨軟部腫瘍の画像診断は最も苦手とする領域の1つかも知れない。画像所見には目を通さず、放射線科医のレポートしか読まない(読めない)整形外科医も多く、骨軟部腫瘍患者を診察した瞬間に、専門施設へすぐに紹介してしまう医師も多い。無論、悪性腫瘍の場合には、迅速な紹介が大切であることに間違いはないのだが、その前に一步立ち止まり、骨軟部腫瘍を専門とする医師がどのような目的のために、どのような画像検査を施行するのかを理解しておくことは、適切な患者紹介を行うためにも重要である。

今回の特集では、骨軟部腫瘍における診断と治療の第一線で、今まさにご活躍されている先生方に、各画像検査法の特徴や最新の知見につきご解説をお願いした。金沢大学の山本憲男先生には、「骨軟部腫瘍における画像診断—総論」として、複数の画像検査を行うことの重要性や、新たな評価法としての総合画像評価法につき解説いただいた。兵庫医科大学の麯谷博之先生には、「軟部腫瘍の診断における超音波検査の活用」と題して、特にスクリーニングや組織診断のための有用性について解説いただいた。骨軟部腫瘍画像検査の gold standard である X 線, CT, MRI については、岩手医科大学の中山学先生に「骨軟部腫瘍の画像診断における X 線撮影と CT の意義」を、杏林大学の本谷啓太先生に「MRI」について、それぞれ解説いただいた。

またシンチグラフィについては、岡山大学の国定俊之先生に、「シンチグラフィを用いた骨軟部腫瘍の機能的画像診断」と題して、特にタリウムシンチグラフィの有用性を、大阪市立大学の星学先生には、「悪性骨軟部腫瘍に対する FDG-PET の役割」と題して、特に PET 検査の有用性について、それぞれの最新知見を含めて解説いただいた。

画像検査を駆使し、骨軟部腫瘍の診断を下すということは、科学的な知的好奇心をくすぐる推理小説のようなものである。時には、たった1つの所見から診断名を導き出し、時には、年齢や発生部位などとともに画像検査所見を組み合わせることで、正しい診断名を推測することができる。そして病理検査でその正しさを確認した瞬間の満足感は、誠に言い尽くせないものがある。読者の先生方には、本特集を通して骨軟部腫瘍画像診断の醍醐味に触れていただき、1人でも多くの新たな画像診断ファンが生まれることを切望している。